

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和元年10月30日（水）14：30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：更田委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。

ヨシノさんからお願いします。

○記者 テレビ朝日、ヨシノです。よろしくお願いします。

今日の定例会見で福島第一原発の規制事務所長さんから話を聞きたいというお話がออกมาして、背景には、1Fの事故収束であるとか、維持管理というところに何らかの懸念があると推測しているのですけれども、委員長はどのような御懸念を持っていらっしゃるのでしょうか。

○更田委員長 懸念というのは少し早いかもしれないけれども、東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業を見ていると、ミスが続いているのは皆さんも見ておられるとおりでと思います。燃料交換機、クレーンであるとか、もちろん福島第一原子力発電所の廃炉作業は1Fならではの難しい作業があるのも事実だけれども、そういったところではなくて、むしろ単純な部分でミスが出ている。典型的なのが今回保安検査の報告であったガードというか、ケーシングの部分のグラウンドが、設置ができていなかった。配線ミスですね。ミスがあっただけではなくて、そのミスを確認すべきものが目視とその記録確認と。

ですから、何が懸念されるかということ、単純に言って人手が足りてないかということにあります。1F検討会に参加している福島の事務所長から、私たちはいくらでも、こういった地方事務所の職員や所長から話を聞くことはできるのですけれども、ただ、委員会という場で所長から率直な感触、見解を聞くということは、広く知ってもらう意味でも意味があると思ったので、そこで、来週になるのか、あるいは再来週になるのかですけれども、やはり日常的に接している検査官、事務職員は、相手が人が足りているか、足りていないかというのは感触として持つものですから、そういったところを率直に聞きたいと思っています。

○記者 ちょっと気が早いかもしれませんが、例えば、問題点が洗い出された段階で何らかの措置というのはあるものなのでしょうか。

○更田委員長 もしそれが東京電力福島第一原子力発電所の中で解決できるものであれば、

そう捉えるのであれば、廃炉カンパニーの中で解決する問題、現在、東京電力からは提案をされている組織体制であるとか、品質管理の問題として捉えることはできるのでしようけれども、絶対的な数が足りないというような議論になったら、これは廃炉カンパニー相手では話が終わらないので、東京電力ホールディングスに対して話を聞くということがあるかもしれません。

○記者 ありがとうございます。

○司会 それでは、サイトウさん。

○記者 毎日新聞のサイトウと申します。

1F関連で、1Fの構内で最近、ガラスバッジの不携帯ですとか、今日お話があったウォーターサーバーの持ち込みですとか、作業員とか管理会社の危機感がちょっと薄れているような事象が起こっているという印象がありますが、委員長はなぜこうしたことが起きるのか、また、こうした事象への対処のお考えがあればお聞かせください。

○更田委員長 なぜ起きるのかについては、推測にしかすぎないですけれども、サイトの大きさ等を考えると、非常に多くの人が入っているということもありますし、それから、建物にしても、人の動く動線にしても、きっちり管理された状態、いわゆる工場であるとか、それから、事故を経ている発電所のような状態とは違いますから、管理の難しさもあるし、さまざまな協力会社の方々が入っているところで、管理の難しさはあるだろうと思いますし、それから、境界の置き方も変化していく現場ですから、その管理は、その他のサイトに比べれば難しさがあるだろうと思っています。ただ、先ほどの御質問と重なりますけれども、そういった難しいところをきちんと管理していくためには、やはりそれなりの人の数も必要だろうということがあると思いますので、ミスが続いている、小さなミスが続いているときには、やはり大きなミスにつながる危険があるわけですから、廃炉カンパニー、そして必要であれば東京電力ホールディングスに対して、その考えなり、改善策なりを問うていくという形になるだろうと思います。

○司会 御質問のある方、いらっしゃいますでしょうか。フクオカさん。

○記者 日経新聞のフクオカと申します。

今の1Fのことに関連しまして、廃炉推進カンパニーの人数自体は、東電に聞きましたところ、約1,400人で、基本的には余り変わっていないということなのですが、人数が変わっていない中で、なぜそういった、委員長が懸念するようなことが起きるのかということと、あと、来年予定している推進カンパニーの中の組織改変に関係して委員長が何か懸念されていることがあれば教えてください。

○更田委員長 まず、当初の非常に難しい状態、例えば、放射線量が高いようなときって、難しい作業に立ち向かうわけだけでも、現場はそう大きくないわけですね。人数で解決できるというよりは、技術上の難しい問題があった。覚えておられると思いますけれ

ども、運営側の海水配管トレンチ、どうやって安定化させようかと。これは人数を投入してという問題よりも技術上の問題が大きかった。今は、大熊側だけではなくて、双葉側にも伐採木を置いて、廃棄物を置いて、現場は以前よりもはるかに広がっているわけです。さらに使用済燃料の取り出しで言えば、4号機をまず取りついて、粛々と進めていた状態よりも、今は3号機にやろうとしていて、さらに2号機、1号機見たときに、オペフロ、あんな状態でどうやって手をつけようという。

ですから、ごく初期には本当に応急的な仕事が多くて、海側のトレンチどうしよう、それから、どうやって地下水の流量を減らそうとしている状態に比べて、明らかに今の作業の方が人は必要です。3号機、2号機、1号機、それぞれに取りついていかなきゃいけないし、タービン建屋側の転がっているがれきだって早く片づけようとしているし、御承知のように排気塔にも取りついていて、それでいて、汚染水から処理済水への処理のプロセスというのはずっと続いているわけだし、管理しなければならない処理済水の量は増えている。ですから、作業は間違いなく増えているし、必要な要員も増えているだろうと思いますから、二つ目の御質問に対していうと、果たして体制をいじることというのが本質か。そもそも絶対的な数が足りていないかというのは、当然、浮かんでくる疑問ですので、それはまずは廃炉カンパニーに問うていくことになるだろうと思いますし、その一助としてうちの地方事務所の感触というのをまずつかみたいと思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 それでは、シゲタさん。

○記者 NHK、シゲタです。

もう一回関連してなのですが、先ほどこういった小さなミスが続いていくと、大きなミスにもつながるかもしれないという話があったと思うのですが、具体的にどういう現場ミスが続いていくと、どういったことにつながりかねないのか、もう少し具体例があったら教えていただいてもいいですか。

○更田委員長 これは一般論としてうなずけるところだろうと思うのですよ。小さなミスが重なっている中で、それに対する対処がきちんとできていないと、大きなミスにつながってしまうというのは、これは必ずしも原子力の現場だけではなくて、一般論として成立するものだと思っていますので、そういった意味で申し上げました。

もし、例えば、小さなミスが重なっているということが、人の絶対数が足りていないということに起因するのだならば、人が足りていないというのはより大きな事象にもつながっていくので、そういった意味での一般論として申し上げました。

○記者 ありがとうございます。

○司会 どうぞ。

○記者 毎日新聞のアラキと申します。

今の人の人数が絶対的に足りていないということなのですが、どうしても資源というところで限られてしまうところはあると思うのですが、人の人数が難しいのであれば、質の向上という形では、やはり質の向上をさせていく中で解決するということが難しいのでしょうか。

○更田委員長 質の範囲のことであれば、今、廃炉カンパニーが提案しているような組織体制の見直しであるとか、品質管理システムの改善といったことで対処ができるでしょうけれども、それには限界があるだろうと思っています。

例えば、点検等に関しても、人手があれば、ワークフォースがあれば、記録確認ではなくて現場確認ができるはずだし、リードする責任者が惜しみなく人を投入できる現場と、それから、やりくりをしなければならぬ現場では、どうしても状況に違いが出てくるでしょうから、今の御質問のことはこれから捉えていかなければならない。本当に人の数が。

また、東京電力の社員の方だけではなくて、協力会社ということもあるでしょうけれども、協力会社の人を得るというのも今はなかなか簡単な状況ではありませんし、ただ、今回の保安検査で報告がされたのは、送電・配電の要員というのは、東京電力はあれだけ広いエリアに配電をしている会社であって、全体としてのやりくりが適正なものなのかというのは、どこまで追えるかですが、ただ、申し上げておかなければならないのは、東京電力ホールディングスは、柏崎刈羽6・7号機の許可を受ける際に、東京電力・福島第一原子力発電所の廃炉をやり抜くと表明したわけなので、当然、しかるべきリソースを投入するのはほとんど義務と言ってよいと思いますので、この辺はきちんと議論していく必要があるだろうと思います。

○記者 ありがとうございます。

○司会 それでは、タケウチさん。

○記者 共同通信のタケウチです。

今の続きの関係でちょっと踏み込んで伺いたかったのですが、人数というお話になりますと、東電も新たにどこからか人を呼んでこられるかということ、それも難しいと思うので、そうなる、やはり1Fにほかのサイトであったり、ほかの発電部門の人員なのか、送電部門の人員なのか、そういう人を張りつけてくださいと。そちらを剥がして1Fに持ってくるということも検討してくださいという、そういう考え方になるのでしょうか。

○更田委員長 それは向こうがやりくりを考えることではあるけれども、ただ、常識的に考えてそうなりますよね。ただ、原子力技術に特化した要員が今必要かということ、必ずしもそうではなくて、今回の事例で考えれば、電気工作技術に係る人だったらあらゆる現場にいるはずですね。それから、例えば品質管理等々に関して言えば、品質管理とい

うのは、これはあらゆる現場にかかわるものなので、必ずしも他の原子力発電所からというだけではなくて、東京電力は配電・売電する会社ですので、その中で要員というのは、これは経営として考えるべきことだと思います。

○記者 先ほど少し触れられていましたが、やはり委員長が今おっしゃられている背景と
いいますか、根本的な考えとしては、東電ホールディングスの中で一番やるべきは1Fの
廃炉であるという、それが大前提にあって、今、問題意識を持たれていると。

○更田委員長 それはもちろんのことだと思います。

○記者 あわせて、先ほど柏崎刈羽の許可の話に言及されましたけれども、適格性の話か
と思いますけれども、ここができれば、ここで十分な対処、人手も含めて対処がで
きないようであれば、それはKKの適格性の話にも影響が及び得るということなのでしょ
うか。

○更田委員長 「適格性」という言葉は少し大げさなのか、必ずしもふさわしいかどう
かは明快ではないですけれども、ただ、これはもう十分記憶されていると思いますけれど
も、柏崎刈羽の許可の前の段階で、東京電力ホールディングスのトップとして、経営者
として、福島第一原子力発電所の廃炉をやり抜くと。これは規制当局に対する約束とい
う以前に、社会に対する約束だと捉えるべきもので、公益企業でそのトップが表明した
わけですから、それはまず規制当局に対するツケ云々ではなくて、あの会社の社会的責
任として認識されている事柄だと私は思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ワタライさん。

○記者 IWJのワタライです。

関連の質問なのですが、約半年ぐらい前でしょうか、東電の中長期ロードマッ
プの進捗状況の会見の中で、小野さんが、構内にコンビニもできてきて、大分放射線の
管理も進んだと。今後、スタッフのモチベーションをどうするかというお話があって、
きれいになって、安全になったというモチベーションの方がいいのか、しかし、廃炉と
いう使命感の方が重要なのかみたいな議論がちょっと出たと思うのですが、そう
いうモチベーションについて、委員長の御所感を伺えればと思いますが。

○更田委員長 なかなか難しいと思います、実際、士気を高く維持するというのは。そも
そも物事を片づける方向のフェーズに入ったときに、その集団の士気をどう維持するか
というのはなかなか容易なことではないでしょうし、これは広く原子力が直面している
一般的な問題の一つであって、東京電力だけの問題ではないかもしれません。

ただ、今、直接的に御質問の中であった福島第一原子力発電所の廃炉作業、確かに小
野さんは、コンビニができて、きれいな食堂ができて、初期のころに比べれば、それは
もう歴然とした差は生まれています。

一方で、では、廃炉に携わっている方々が楽な現場になったかと感じているというこ

とは決してないと思います。むしろ今までのぞけないところがのぞけるようになりまし
たから、かつて全然近寄れなかったところへ、今は駆け足だったら通り抜けられるよう
になったわけです。2号機の1階だって、長くはられないけれども、通ってこられる。
オペフロだっでのぞけるようになった。

そうすると、いかに自分たちがこれから立ち向かわなければならないものが厳しいも
のかというのは、より明らかになった側面がありますので、職場環境は確かによくなっ
ているけれども、戦う相手の厳しさというのは、かつてよりもさらに厳しい姿をあらわ
している状況にありますから、必ずしも小野さんが心配されるように、きれいになった
ということで士気が落ちるといよりは、やはりまだまだこれからが大変だという認識
は、現場に立っておられる方々は率直に感じておられることだと思います。

○記者 わかりました。ありがとうございました。

○司会 ほか、ございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、本日の会見は以上としたいと思います。お疲れさまでした。

—了—